

あの頃の地域のおっちゃんに、私もなりたい

前川 良太

園を一番最後に閉める勤務の日のことです。少しゆっくりな出勤時間まで、自宅で溜まった家事をしていると、大きな音がして何事かと表に出ました。すると、ちょうど自宅の真後ろにある小学校の校庭から、低学年ぐらいの男の子たちがこちらへ向かって石を投げこんでいるところに出くわしたのでした。自分の足元を見ると大きな石がいくつも転がっていて、壁にはぶつかった跡が…「だれや！」ととっさに問いかけると「〇〇がやった」とだけ言って逃げていきました。どうしようか、こどものやったことやしな…と半ばまあいいかとあきらめようとした（性格が穏やかだからではなく、単にめんどくさかったのです）。だけど、なんかそれもある子たちにとってどうやねんという気持ちと、不在の間にまた投げられてもなど、重い腰を上げて徒步1分の小学校へ出向いたのでした。そしてその日の夕方学校から連絡があって、子どもたちが謝りたいと言っている報告があったので、後日学校に出向くことになりました。

「こんなことあってさ～」そんなことをつばさの事務室で話をしていました。その頃の私の胸の内は、仕事でも顔を合わせる校長先生に頭を下げられ、子どもは来年からその小学校へ通うし、自分が子どもの頃からよく知る先生が生徒指導担当で電話がかかってくるし、で、正直気まずいやら申し訳ないやらでいたたまれない気持ちでいました。そんな私にいけもっちゃん（池本副園長）が「そんなん自分の子やつばさの子がやったと想像してみ。」と、あっさり一言。なるほどな。我が子が同じことをやってしまったら、相手の人になんて言ってほしいやろうか。どうしてほしいやろうか。そんなことを考えながら、地域の一人のおっちゃんとして、後日改めて小学校へ行き、まだどこか幼い地域の子どもたちと話をしてきました。

いけもっちゃんはこうも言っていました。「今のうちにいっぱい心動かして、失敗する経験って大事やでな。」私も本当にそう思います。思い返せば自分自身も駄菓子屋のおばちゃんや近所のおじさんによく怒られたなと思います。中には理不尽やなあと思うことがあっても「そんな人もおるんやな。」といい勉強でした。子どものうちに、取り返しのつくうちに、たくさん失敗もして痛い思いもして、叱られ、そしてまた許されて受け止めてもらう、その繰り返しがとっても大事なことだと思います。私たちが一緒に子育てしようと言って、親子まつりにみんなで集まったり、我が子だけでなくよその子も知るような懇談会をしているのはそのためです。時は巡り、今こそ私たちが地域のおっちゃんおばちゃんになる番です。みなさんはどんな地域のおっちゃんおばちゃんでありたいですか？